

7月31日 コリントの信徒への手紙Ⅱ 6章1～10節 今日の説教から

説教題：「何度聞いても」

皆様は、このような経験をしたことはあるでしょうか。「何度聞いても、パソコンやスマートフォンが難しくて分からない」「何度聞いても、この授業は難しくて理解できない」「何度聞いても、あの人の顔は思い出せるんだけど名前が覚えられない」など、覚えようとしても、理解しようとしてもなかなか頭に入ってこない、そんな経験はありますでしょうか。実際私たちは聞いたそのすべてを覚えることは出来ず、多くの部分を忘れてしまいます。だからこそ聖書を読んでもそのたびに「新鮮な驚き」を得ることが出来るのですが、できれば忘れず覚えておきたいものです。そして悲しいことに、聖書の言葉を何度聞いても、イエス様が教えてくれている「正しい生き方」を守ることが、決してできているわけではない自分に直面することになります。

ただ、初代教会を支えたパウロたちは多くの苦難に直面しても決してくじけることはありませんでした。彼らは心の底からの「誠実」によって、それが正しいと確信しながら迫害を受ける道を歩んだのです。それは、今日の個所でパウロが語るように、「死にかかっているようで、生きている」「悲しんでいるようで、常に喜んでいる」「貧しいようで、多くの人を富ませている」そんな、物事の摂理を逆転させる、驚くべき力をもった方が私たちの神様だからなのです。神様は、神様を信じて死んだ人を死んだままにはしておきません。誰かが迫害によって失われたとしても、それはただの哀しみではなく、神様の元で安らかでいる、そしてまたいつか再開できるという喜びに変わります。そして、命という、私たちの持つ何よりも大切なものを失うことになったとしても、私たちはその人生によって、多くの人を神様の元へと導くことでしょう。その豊かな恵みを知っているからこそ、私たちも同様にこの苦難の時代の中を、堂々とキリスト者として歩むことができるのです。

私たちは何度同じ聖書の言葉を聞いても、やがてそれを忘れてしまう悲しい生き物です。ほとんどの人がそうなのです。ただ、私たちは同じ聖書の言葉読むたびに、改めて新鮮な感動を教えてもらっています。同じ御言葉、同じ神様の愛、イエス様の十字架自体は何も変わらない、唯一不変のものです。ただ、それを受けとめる私たちは、日々成長し、経験を重ねて生きています。時に、「苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓」、そんな様々な苦難が私たちを襲うかもしれません。苦難の中では、世界のすべてが自分の敵になってしまったように感じるかもしれません。しかし、「人を欺いているようでいて、誠実であり、人に知られていないようでいて、よく知られる」ような、そのように私たちは自分が見ている常識では説明できない、神様の力の中にいます。目に見える事実とは正反対のことが起きる、その神様の力の中で私たちは「何度聖書の言葉を忘れても、確かに御言葉は心に刻み付けられている」のではないのでしょうか。少しずつ、それでも確かに私たちは神様に清められて変わっているのです。同様に私たちの言葉も、私たちの日毎の業も、確かに誰かに影響を与えて、誰かを変えることが出来ている。神様の元へと少しずつでも導くことが出来ているのです。それが私たちの神様の力なのです。

神様の力に支えられて日々用いられている喜びを胸に、今週一週間の、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：コリントの信徒への手紙Ⅱ 6章1～10節

- 1:わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。
- 3:わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。